Ⅱ 教育課程　第6分科会　社会形成能力

■ 研究課題 ■

社会形成能力の育成を目指す教育課程の編成と校長の在り方

分科会の趣旨

東日本大震災や豪雨等による被災地においては，子どもたちが率先してボランティア活動を手伝ったり被災住民を励ます支援活動を行ったりする姿が多く見られた。こうした事例から地域の身近な人たちとの絆が改めて見直されており，地域コミュニティーを維持発展させていくことがますます重要と考えられている。

校長は，これからの社会を生きる子どもたちにしなやかな知性と豊かな創造性，豊かな人間性を育むとともに，子どもたちが自己の置かれている状況を受け止め，他者と協力して社会の様々な活動に参画し，社会形成能力の基礎を身に付けられるようにしていかなければならない。さらには，開かれた学校として地域コミュニティーの核となり，社会とどう関わり，どのように貢献していけるかを考えた学校づくりを進めていかなければならない。

そのためには，学校は，子どもたちが考え行動するプロセスを重視し，地域の特色を生かした豊かな体験活動をさらに積極的に取り入れていく必要がある。視点としては，社会体験活動を教育課程に位置付け，子どもたちに多様な地域社会の課題に触れさせ，その解決のために地域で一定の役割を担わせることにより社会の一員としての自覚や自発性を身に付けさせていくことが考えられる。また，キャリア教育等の視点を取り入れた教育活動に取り組ませることにより，幅広い学力，コミュニケーション力や規範意識を身に付けさせたりする等の社会的・職業的自立に必要な能力を高めさせることが考えられる。

本分科会では，校長のリーダーシップのもと，将来の社会を形成する役割を担う子どもたちに，各教科等で身に付けた知識や技能等をもとに，より良い社会の形成に向け，主体性をもって社会の活動に積極的に参画し，課題を解決していく力や態度を養うための具体的方策を明らかにする。

リーダーシップの視点

〔1〕 社会に貢献する力の育成を目指す教育活動の創造

核家族化，少子化等による家庭の養育姿勢や地域コミュニティーの変化に伴う地域活動への参加機会の減少等により，子どもたちは家庭や地域において，社会性を高めたり人間関係を育み広げたりする機会が減ってきている。

学校には，家庭や地域と連携しながら，子どもたちに様々な人々や社会と関わり，社会生活の基本的ルールを身に付けさせるようにしたり，社会との関わりを豊かにしていく力を身に付けさせたりすることが求められている。さらには，社会の変化に対応し，より良い社会の構築に貢献できる力を育成することも求められている。

このような視点から，子どもたちに他者と協力して社会の活動に参画し，貢献しようとする意欲や態度を身に付ける教育活動を学校が創造するための校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

〔2〕 自立した社会人を育成するための教育課程の編成・実施・評価・改善

学校は，子どもたちに社会の仕組みを理解させ，自立した社会人として生きていくために必要な知識や能力を育み，社会の発展に積極的に関わろうとする態度の育成を目指した教育課程を編成する必要がある。

このような視点から，子どもたちに社会の中での自己の役割，働くことや夢をもつことの大切さを理解させ，地域社会への興味・関心の幅を広げさせることや，互いの個性や人との絆を大切にする社会づくりに貢献しようとする自立した社会人として生きていくための基礎となる力を付けさせる教育課程を編成・実施・評価・改善していくための校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

第6分科会　研究課題：社会形成能力の育成を目指す教育課程の編成と校長の在り方

研究発表

子どもの生きる力を育み将来にわたって地域を支える人を育む，地域の環境を生かした体験活動を軸にすえた教育活動を展開するために

根室地区　中標津町立西竹小学校　横　山　裕　充

Ⅰ　趣　　旨

研究課題にある「社会形成能力」は，平成23年１月31日中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」における「基礎的・汎用的能力」の中の一つに見られる。

本分科会では，社会に貢献する力の育成を目指す教育活動の創造と自立した社会人を育成するための教育課程の編成・実施・評価・改善をリーダーシップの視点として，将来の社会を形成する役割を担う子どもたちに，各教科等で身に付けた知識や技能などをもとに，より良い社会の形成に向け主体性をもって社会の活動に積極的に参画し，課題を解決していく力や態度を養うための具体的方策を究明するとしている。

課題にある，子どもたちに身に付けさせたい能力は，「キャリア教育」という一つの活動で身に付けるようにするということではなく，教育活動全体で身に付けていけるようにすることであるととらえている。このことは，身に付けさせたい能力を指導する側がいかに意識しているかが大切であるということである。

また，前述の答申の「人間関係形成・社会形成能力」の説明で一文となっているが，「自己の役割を果たすこと」「他者と協力・協働すること」「何かに取り組む意欲や態度」など，キャリア教育でなくても，学校教育において身に付けさせていきたい事柄である。

さて，根室管内は，山，川，海という自然の宝庫が生活のすぐ身近にあり，自然という教育資源が得やすい環境にある。一方，小規模校の割合は，全道が約60％に対し，78％を占め，その内極小規模は約40％に上る。加えて若い新任教師が多いことは，一層校長の指導力が問われる。

これらのことから，校長の役割と指導性について，社会形成能力の育成の視点を踏まえた活動をどのように意識して取り組むかを教育課程全体に関わる中心的な教育活動をもとにした小規模校の実践，地域の人との関わりをもとにした多学級の学校の実践を通して述べることとする。

Ⅱ　研究の概要

1　実践の前提として

前述の答申では，社会形成能力を含む４つの基礎的・汎用的能力の育成の前提として「学校や地域の特色，子どもの発達の段階によって異なると考えられる」こと，「学習指導要領を踏まえて育成されるべきである」ことが示されている。

したがって，教育課程全体を貫くものが大切である。このことから，キャリア教育の全体計画の構想は必須である。

そして，考えたいのは，子どもが主体的に学ぶ「学習」活動の充実であり，中でも大切なのは，地域の教育資源としての環境，特に，自然環境である。これは，文部科学省「平成14年学習意欲に関する調査研究」でも明らかなように，「子どもたちは，自然体験により勉強への意欲が増加する（特に小学生）」からである。子どもが「主体的に」学び続けるには，「意欲」は不可欠である。また，「子どもの頃の自然体験が豊富な大人ほど，やる気や生きがいをもっている人が多い（国立青少年教育振興機構平成22年５月中間報告）」ことも明らかになっている。

加えて，体を通して学ぶことは，子ども自身が実感，納得を得やすく，知識・理解の定着に結び付くと考える。さらに，思考力・判断力・表現力を高め，一層の確実な定着を図るために言語活動の充実が重要である。

また，子ども時代になすべき大切なことは，子ども一人一人のアイデンティティーの確立のための素地をつくることである。前述の自然体験が大人になってからのやる気や生きがいにつながるように，子どもの時代での自分のよさがわかる，自信をもつなどは，生涯にわたる重要な要素になると考えている。

これらの基本的な考えのもと，それに向けた組織的な学校運営や校長のリーダーシップをどう発揮するかである。

2　研究課題を究明する視点

(1)　自立した社会人を育成するための教育課程の編成・実施・評価・改善

①　キャリア教育の全体計画の作成

目標を「子ども一人一人が自分のよさを理解し，夢や希望（望ましい勤労観や職業観）をもって主体的に進路を切り拓いていける能力を育成する」と設定した。そのために，各発達の段階ごとのねらいが必要であると考えることから，低学年「事物・現象への関心・意欲を高める」中学年「自主的・主体的に行動できるようにする」高学年「社会性を養い自主的・自律的に行動できるようにする」と設定した。

校区の中学校長とキャリア教育について話したとき見解が一致したのは，中学校としては，職業体験を行うが，小学校ではその素地を育てることが大切であり，「夢や希望」はその素地に含まれるということであった。

そこで，これらを実現するために各教科等で意識すべき重点としての内容を拾い出した。とりわけ，道徳の時間においては，「挨拶」と「自尊意識」に関わる内容項目を重視した。これは，地域の職業体験支援団体の方と懇談したときに，第一に挙げられたのが，「挨拶

ができること」であったためである。また，望ましい勤労観や職業観に関する内容項目は，自己肯定感や向上心といった自尊意識と重なるものであり，全国学力学習状況調査では，学力との正の関連があるとされている内容である。

② 道徳的な学び

道徳教育の推進に当たっては，各教科等においてどの内容項目が当てはまるかを洗い出し，適切に位置付けるため，「別葉」の作成が求められている。各教科等においてどのような道徳的学びがあるのかを意識して指導するかしないかでは，おのずと結果は変わってくる。

キャリア教育の全体計画には，関連する道徳の内容項目を位置付けている。例えば「身近な集団に進んで参加し自分の役割を自覚し，協力して主体的に責任を果たす」や「働くことの意義を理解し，社会に奉仕する喜びを知って公共のために役立つことをする」など，これらを踏まえて指導することは，結果として自立した社会人の育成等につながっていくものと考える。

また，キャリア教育の実践の仕方は，「道徳的な学び」の考え方や実践の仕方という点においても同様に考えて実践することができる。

③ アイデンティティーの確立

キャリア教育における基礎的・汎用的能力の一つである「自己理解・自己管理能力」の説明には，「子どもや若者の自信や自己肯定感の低さが指摘される中，やればできると考えて行動できる力が必要であり，キャリア形成や人間関係形成における基盤となるものである。」とある。

自己肯定感～「セルフ－エスティーム」は，自尊感情，自尊心，自負心，自己評価，自己尊重，自己価値などに訳されているが，ここでは全国学力学習状況調査で使っている「自尊意識」という言葉を使う。

全国学力学習状況調査の質問紙にある項目で「自分にはよいところがある」と答えた子どもは，平均正答率が高い傾向にあるということである。この項目は，まさに，社会形成能力の育成（キャリア教育）に深く関わっていると考える。

つまり，子どもの時に培った自尊意識は，子どもの時も大人になってからも生涯にわたって，その時ならではの生きがいや希望，楽しみをもつことにつながるからである。

ア 自然体験の価値

ブルームの「学校での学習に関するモデル」を持ち出すまでもなく，学力には，学習に入る前の認知的要因，情意的要因，そして，授業の質の三要素が大きく左右することは周知のことである。この授業に入る前の認知的要因の意味するところは，これまでの経験が豊富であるほど授業での学びが豊かになるということである。ただ単に，授業で学ぶべき知識をあらかじめより多く知っているという意味ではない。

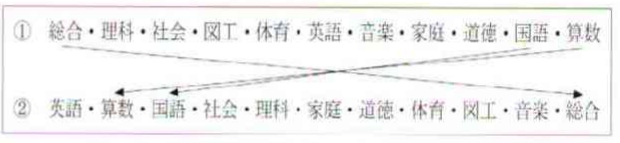
ここで，自然体験が真価を発揮する。子どもたち自身が生活する身近な環境であることも重要である。この体験を基盤として学習に向かうとき，一人一人に豊かな課題性が生まれ，意欲的に学んでいくことになるのである。

イ 授業の構想

前述の情意的要因には，教科の好き嫌い（得意あるいは不得意と感じている）が含まれる。一般に，個性や可能性を伸ばしていくためには，その子ども自身が「算数が得意」「体育が得意」「絵を描くのが好き」など，自分の中で好きなことや人よりも優れていると思えることなどの自覚を通して，自分の価値観や役割，自信などを積み重ねていくことが大切である。この過程は，子どもの自我やアイデンティティーの確立という意味からも重要であるということである。

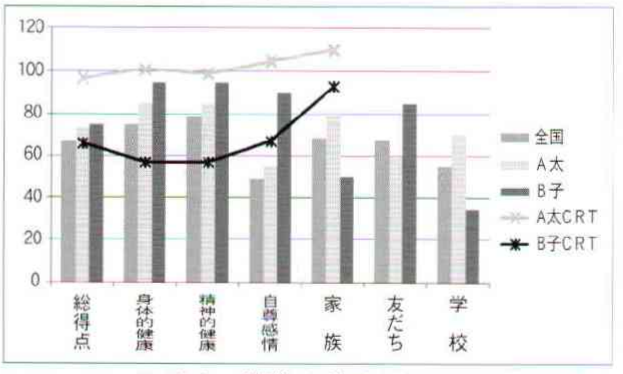
そこで，①好きな教科と②将来役に立つと思う教科の順位について調べた。例えば，Ａ太（高学年）の好きな教科は「総合的な学習の時間」だが，大人になって役に立つと思っている教科としては最下位にランク付けされている。一方好きな教科のランクでは下位にある国語・算数が，役に立つと思っている教科の上位となっている。

今後，このずれを修正していくことが，子どもにとっても授業の効果としても必要なことである。好きだと思える学習が役に立つと思えた方が，子どもが自己内矛盾を抱えることなく抵抗なく伸びることになると考えるからである。



ウ 自尊意識の醸成

下図のグラフは，古荘純一氏の「クオリティーオブライフ（ＱＯＬ）」尺度調査の質問項目を使って実施した結果の棒グラフとＡ太，Ｂ子が１年生から５年生までの算数のＣＲＴ（全国平均を100としたときの割合で示している）の経年変化の折れ線グラフである。国語についても類似した傾向を示している。



Ｂ子は，算数を苦手としており，１年，２年，３年生と低迷していたが，４年生で上がる兆しが現れ，５年生では飛躍的に向上した。この子たちは，体験活動中心の現教育課程を始めたのが，４年生の時で，現在６年生の３年目に当たる。このテスト結果が示すように，向上とともに自尊意識も高い値を示すようになったＢ子が，最も低い値を示したのは，「学校」の項目で，自分が他の子どもより成績が悪いことを気にしているためであり，なかなか払拭はできない。

前述の好きな教科と将来役に立つと思う教科の順位にずれを抱えるＡ太は，算数のＣＲＴの結果については全国平均レベルにある。しかし，自尊意識はそれほど高くな

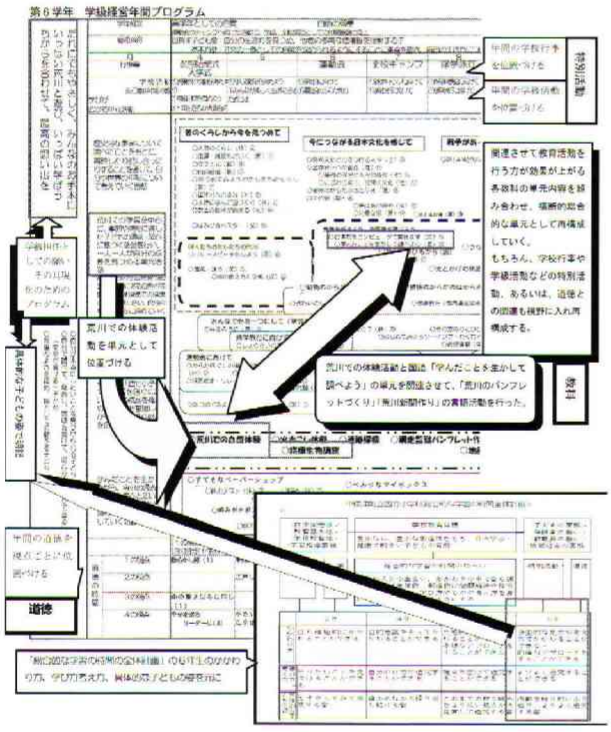
い。成績については，これまで悪かったことがないため，「学校」の項目も低くはない。むしろ「友だち」との関係の中で仲良く見えるが孤独感をもっている様子がうかがえる。

(2) 社会に貢献する力の育成を目指す教育活動の創造

① 体験活動を軸にした年間プログラムの作成

子どもの主体性を高めるためには，子どもが体を通して（五感を使って）学び，実感する体験活動とその活動を振り返ることによって学びへの気づき，定着，発展させるために書くこと，話し合うことなどの言語を使った表現活動を行うことが有効である。

さらに，子どもが「主体的に」自分の力を発揮することでその力が伸びていくのであるから，年間を通して体験活動と各教科等の内容がどのように関連しているのかをとらえておく必要がある。各教科等の年間指導計画は，教科ごとに分かれているので関連性が見えにくい。そこで，各教科等を横断的・総合的にとらえた年間指導計画＝「年間プログラム」を学年ごとに作成することにより，体験活動と言語活動，他教科等との関連が見え，漏れや落ち，重なりがないように実践することができる。



② 地域との関わり

前出の中間報告の中に「子どもの頃の地域活動経験のある大人ほど，職業意識が高い」とあり，地域とのつながりを大切にする取組が，社会に貢献する力の育成に大きく関わると指摘されている。

ア　学習活動の発展から

地域の自然環境を生かした教育活動の展開は，この点においても効果を発揮する。

子どもたちが生活する地域の自然環境であるから，活動の広がりは，容易に地域住民との交流に結び付いていく。そこで，地域の歴史を知ることになったり，地域の活動への参加につながったりと無理なく学習が展開していくことになるのである。

イ　地域・関係機関等との連携

ここでは，多学級学校での教育課程外での取組について紹介する。

標津町では，町内各所でそれぞれで行われていた祭りを「標津町民祭り水・キラリ」という名称でまとめて，1999年にはじめた。統一した祭りは，標津らしい伝統や文化，豊かな自然の継承という観点から，水を守り，水に感謝し，それを次代に引き継いでいくために伝説まで創作した。これに基づいて，一連の儀式や五基の山車（町内会連絡協議会，農協，漁協，商工会，キラリ子供会）を造っている。

学校は，「キラリ子供会」の山車や踊り，おはやし，伝承劇への参加を通して祭りに深く関わっていく。このために，「キラリ・子どもの会」という名称の運営組織をつくり，「学校と地域の強い絆と連携により，故郷の未来を担う子どもたちの山車や踊り，おはやし，伝承劇などへの関わりを創りあげ，祭り文化の伝承活動の中から健全な青少年の育成を推進する」という目的を掲げ，中心校の校長が会長となり，関係機関団体等と連携して取り組んでいる。

町を挙げてこのような行事に取り組んでいくことは，町を愛し，地域を愛し，将来にわたって地域に貢献していく子を育んでいくことになる。

Ⅲ　ま　と　め

1　教育目標の実現に向けて

教育活動は，教育目標の実現にある。本課題である「社会形成能力の育成」をそのまま教育活動として教育目標の実現に取り組む場合もあるだろうし，教育活動を「社会形成能力の育成」というフィルターを通してみる場合もあるだろう。本稿では，後者の立場をとっているが，この際，地域の環境を生かした体験活動を軸にすえた教育活動を行うことの汎用性の高さを確認することになった。

従来から言われてきているとおり，体験活動は学校の教育活動にとって必要不可欠である。ただし，地域の教育資源を把握し，どのような視点をもって教育活動に生かすかについては，校長のリーダーシップが問われるところではないだろうか。

2　成果と課題

地域の環境を生かした体験活動を軸にすえた教育活動の実践は，取組の具体性から，当地域の特徴である若い教員集団でも仮説検証しやすいなど取り組み易く，また，積極的に学校運営に参画できるという成果を得た。

ただし，これが大規模校であるならば，さらに工夫が必要であるとともに，都市部ほど良好な自然環境などの教育資源を見つけることが難しいなど，課題もあると考える。

【参考文献】
「子供の自発性と学習意欲」伊藤隆二・坂野登編　日本文化科学社／「日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか」古荘純一　光文社新書